
エヴァンゲリオン・入れ代わり

李 志布

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エヴァンゲリオン・入れ代わり

【Nコード】

N7711H

【作者名】

李 志布

【あらすじ】

アタシはエヴァ3号機にテストパイロットとして搭乗するも、直後に使徒に乗っ取られてしまう。その後、エヴァ3号機は使徒として殲滅され、アタシは死んだはずだったのだが……。

第1話：式波から惣流に

(アタシ死んじやたのかな?)

アタシはシンジの乗る初号機に、エヴァ三号機と共に使徒として殲滅された。

はずだった。

気が付くと、全裸で野外のバスタブの水にアタシは浸かっていた。

「キヤー！なんでアタシがこんなところで全裸でいるのよ？」

あと、ろくにご飯を食べていなかったらしく、強烈な空腹感がアタシを襲った。

「一体なんなのよ？とりあえず服を着ないと」

アタシはバスタブの横にあった制服を着た。

アタシの体はとても重く、やつれてはいたがケガは全く負っていないようだった。

「お腹が減り過ぎ……。とりあえず家に帰って、シンジにご飯を作ってもらおう」

アタシは思うように動かない重い体を引きずるように歩き、なんとか家にたどりついた。

「疲れた……。シンジ。ただいま……」

シンジはアタシの姿を見ると、こちらに向かって走ってきた。

「アスカ！無事だったんだね！」

シンジは目に涙を浮かべながら、アタシを抱きしめくれた。

（アタシのこと心配してくれてたんだ）

アタシはシンジに抱きしめられて、えこひいき風に言うと、気持ちがとてもポカポカしていた。

（このままずっとシンジに抱きしめていてほしいな）

そんな幸せな時間を、アタシのお腹はぶち壊した。

グウーッ！グウー……！

空腹に耐え兼ねたアタシのお腹が、盛大に鳴ったのだ。

シンジはその音を聞いて冷静になったのか、抱きしめていた手をアタシから離れた。

「じっ、ごめん。いきなり抱きついたりして」

アタシは恥ずかしさのあまり、たぶん顔が真っ赤になっていたと思う。

「べっ、別に気にしなくていいわよ。それよりシンジ。何か食べる物作ってくれない？」

「そういえばアスカ、かなりやつれてるね。わかったよ。あまり材

料はないけど何かつくるよ」

「よろしく頼むわ。アタシ先にお風呂に入って来るから」

アタシはお風呂でいろいろと考えていた。

アタシは体を洗いながら顔を見てみると、顔はゲツソリと痩せこけ、アバラも浮き出ていた。

「ひどい。これがアタシの体だなんて・・・」

アタシはエヴァを乗っ取られた時に、使徒に生気を奪い取られたため、こんな体になってしまったのだと結論付けた。

「シンジのおいしいご飯をこれからたくさん食べて、早く元通りにならなきゃ・・・」

お風呂から上がると、リビングからいい匂いが漂ってきた。

「アスカ。食事の用意ができたよ」

「わかった。今行く」

「挽き肉があったから、ハンバーグを作ったよ」

「ありがと。じゃ、いただきます」

合成肉でもシンジの作る料理はとてもおいしい。アタシは好物であるハンバーグに箸を付けた。

(何?この味。すっごくおいしい!)

「アスカ、味はどうかな」

アタシは今までに食べてきた合成肉の料理とは、明らかに異なる食感と美味さに、シンジを素直に誉めた。

「今まで食べてきた合成肉の料理とは比べ物にならないくらい、おいしかったわシンジ」

「合成肉って？それは牛肉だけど」

「えっ？牛肉？・・・シン・ジ・く・ん アタシをバカにするのは百年早いわよ」

バカにされたと思ったアタシは、シンジの頭をグリグリした。

第2話：違和感

「ほつ、本当に材料は牛肉だって。合成肉だなんて、そんなお肉、見たことも聞いたこともないよ」

どうもシンジは、アタシに嘘をついていないようだった。

(何か、おかしいわね)

アタシは自分の頭をフル回転させた。

そういえばアタシの部屋の扉の前に、ピカソのような文字で、シンジを威嚇する言葉が書かれたボードが掲げてあった。

部屋に入ると、アタシのママのお気に入りだった人形が無く、代わりに猿のぬいぐるみがあった。

アタシの愛用していたワンダースワンも無くなっていった。

まだ開けていない箱の名前を見ると、アタシの名前である式波ではなく、Sohryuと書かれた。

アタシはどうやら使徒の力によって、別の世界に飛ばされてしまったようだ。

真剣に考え事をしているアタシを、シンジは心配そうに見つめていた。

「大丈夫？いろいろあったから、アスカは肉体的にも精神的にも疲れているんだよ」

「そうかもね。最近の記憶が喪失しているかもしれない」

シンジの話しにアタシは合わせると、シンジに出会いから、今まで

の出来事を聞いてみた。

「ふーん。そんなことがあったんだ……」

アタシはシンジの話しを一通り聞くと、この世界でのシンジともう一人の自分に心から同情した。

「……カヲルくんを……僕は……僕は……この手で……」

シンジは体を震わせながら、涙を流していた。

「シンジは悪くないわ。シンジがそうしなかつたら人類が滅んでいたんだもの……。アタシがこうして生きていられるのはシンジのおかげよ」

アタシはシンジを抱きしめた。

シンジはビクッ！と一瞬体を震わせたが、シンジもアタシの体を抱きしめてきた。

「アスカ……アスカ……アスカ……」

アタシの胸に顔を埋めたまま、シンジは何度も何度もアタシの名前を呼んだ。

しばらくの間、アタシとシンジが抱き合っていると、家の扉が開いた。

「アスカ！無事だったのね」

アタシは慌ててシンジから離れた。

ミサトはアタシ達の姿を見ると、急いで目の前までやって来た。

「シンジ君。アスカとの感動の対面のところ、悪いんだけど、急いで私と一緒に本部に来て欲しいの」

ミサトの感情の込もっていない事務的な物言いに、アタシはこの世界が、改めて別の世界であることを、再認識させられたのだった。

第3話：抱擁

アタシとシンジはミサトによって、ネルフ本部に連れて来られた。アタシの体は思ったより衰弱していたみたいで、数週間の入院を命ぜられた。

アタシが病室のベッドで横になって点滴を受けていると、扉が開きシンジがやって来た。

「アスカ。体調はどう?」

「うーん、万全ではないけどそんなに悪くはないわ」

「早く元気になってねアスカ」

「そうね、病院食はあまりおいしくないし。退院したらまたハンバーグ作ってね」

「う、うん。前よりもっとおいしいハンバーグをつくるよ」

「Danke!よろしく頼むわよバカシンジ」

アタシがそう言うと、シンジは肩を震わせていた。

(調子に乗ってバカシンジなんて呼んだから怒ったのかな?)

「うつ、うつっ…グスッ…」

どうやらシンジは泣いているようだった。

「アスカ、怖いんだ…綾波もミサトさんも…みんな怖いんだ…」

シンジはそう言うと、アタシに抱き着いてきた。

「ちよっ、ちよっどシンジ」

「アスカ…アスカ…アスカ…駄目なんだ…アスカが僕の傍に居てくれなきゃ駄目なんだ」

(この世界のシンジは、今のアタシではとても堪えられないくらいの、酷い思いをしてきたんだ…)

アタシはシンジが哀れに思い、シンジを抱きしめた。

「心配しなくていいわ。アタシはシンジの味方だから」

「アスカ…本当？」

「本当よ。だからシンジも早く元気になりなさい」

「う、うん。僕も早く元気になるよ」

「よろしい。それよりアンタ、顔がすごいことになってるわよ」

シンジの顔は涙と鼻水で、びちゃびちゃに濡れていた。

「えっ？あっ？」「じめん」

「ぶっ！あーはっはははははは」

アタシは思わず大声で笑っていた。
その時、病室に警報音が鳴り響いた。

第4話：惣流アスカラングレー

ヴーッ！ヴーッ！ヴーッ！ヴーッ！

『総員第一種戦闘配置』

『繰り返す、総員第一種戦闘配置』

ネルフ本部全体が戦闘状態に入ったことを告げる放送が流れた。

「シンジ、どうやら使徒が来たみたいね」

「そうみたいだね……」

「こうしちゃいられない！シンジ！行くわよ」

「うん、わかったよアスカ。でもあまり無理しないで」

「わかってるわ、シンジ」

アタシは点滴針を外し、体を起こした。

その時！

急に辺りが暗くなったかと思うと、目の前にプラグスーツを着たアタシが立っていた。
ケガをしているらしく、頭と左目、右腕が包帯で包まれていた。
右目でアタシを威嚇するように睨みつけると、嫌味たらしきことう言った。

『アタシの体を勝手に使わないでくれる？自称ユーロ空軍のエース、式波・アスカ・ラングレー大尉』

「アンタが惣流・アスカ・ラングレーなの？」

『そう、アタシが惣流よ』

アタシはこの世界のアタシと対面することになった。

『アンタ、バカね。あんなヤツに優しくするなんて。アタシがこの世界で、シンジにどんな目に合わされたかアンタに教えてあげるわ』
睨みながら不敵な笑みを浮かべ、アタシに近付くと、アタシの頭に手を置いた。

「一体、何を？」

『いいから、そのままおとなしくしてなさい』

この世界でのアタシ、惣流・アスカ・ラングレーの体験が走馬灯のように、アタシの頭の中に流れ込んできた。
アタシは無意識の内に、涙を流していた。

「うっ、うっ、うああああ……っ！」

アタシはしばらくの間、泣いていた。

『どっつ?..これでもアンタはシンジのことが...』

「.....っつせー!」

『!』

「アンタ、アタシより恵まれてるじゃない!」

『なっ、なんですって?』

「シンジがレイじゃなく、アンタを望んだんじゃない!」

『!.....!』

「シンジは頑張った。どんなに困難で辛いことがあっても、そのた
びに立ち上がった!辛いのはアンタだけじゃない!」

『うっさい!アンタにアタシの何が分かるのよ!』

「アタシはアンタとは違う!アタシはずっとシンジの傍に居たい!」

『.....ふんっ!アンタの決意がどれほどのものか、見せてもらっわ』

アスカ.....

アスカ...

「アスカ！」

目覚めると、シンジが心配そうにアタシを呼んでいた。

「アスカ！よかった、急に意識を失ったから心配したんだよ」

「ごめん、急に起き上がったから貧血になったみたい」

シンジはアタシを、抱きしめてくれていた。

（惣流・アスカ・ラングレー。アタシの選択が誤りでないことを、必ず証明してあげるわ）

第5話：惣流から式波に

(なにがシンジの傍にずっと居たいよ！…せいぜいそっちのシンジと一緒に絶望しなさい！)

式波ア…

式波アスカラングレー…

(うるさいわね！アタシは惣流よ！)

『応答せよ！式波アスカラングレー大尉！』

アタシは使徒戦直前の2号機の中で目覚めた。

『どうした？初の使徒との実践の前に、緊張しているのか？』

「いいえ。申し訳ありませんでした」

『この使徒との戦いは、我々ユーロの未来が掛かっているのだ』

(はいはい。この世界でのアタシのデビュー戦ってわけね)

「はい。分かっております」

『あと数分で使徒上空に到着する。切り離した後、使徒を殲滅せよ』

「了解」

(アイツの動きをそのままトレースするだけ。ちよろいもんね)

ただアタシには若干の不安があった。

(式波としてのコイツの記憶は3号機搭乗までなのよね。まっ、なんとかなるでしょ。3号機にはファーストに乗ってもらえばいいし)

『これから切り離す。派手に使徒を殲滅して、ネルフ本部のヤツラに我々、ユーロの力を見せつけてやれ』

「了解。これから使徒との戦闘に入ります」

アタシを乗せる2号機が、ウィングキャリアーから切り離された。式波アスカラングレーとしての、アタシのデビュー戦が始まった。アタシはアイツの動きを忠実にトレースし、難無く使徒の攻撃を裁くと、使徒のコアを蹴りで貫いた。

「使徒の殲滅を確認。任務完了しました。このまま地上に着陸します」

『了解。よくやった、式波アスカラングレー大尉。君は我々ユーロの誇りだ。』

「ありがとうございます」

(何が誇りよ。人を道具として使い、役に立たなくなったらゴミのように捨てるくせに！)

着陸体制に入ったアタシの視界に、ミサトとシンジの乗った車が入ってきた。

(チャンス。このまま踏み潰してやる！)

着陸する直前で、アタシは思い留まった。

(今復讐しても、つまんないわね。徹底的に追い詰めてから復讐してあげるわシンジ)

第6話：シンジとアスカ（惣流パート）

ネルフ本部に輸送される2号機の上に、アタシは立っていた。

しばらくすると、ミサト、シンジ、ファースト、ジャージとメガネの姿が、アタシの視界に入ってきた。

アタシは2号機から降りると挨拶をするために、ミサトに近付いた。

「久しぶりね、ミサト」

「お久しぶり、アスカ。みんなに紹介するわ。彼女はユーロ空軍のEースでEVA2号機パイロット、式波・アスカ・ラングレー大尉よ」

（…葛城ミサト。アタシから大切な物を奪っていった偽善者、家族ゴッコ女、ヘドが出るわ！）

「ウツ！」

上面だけ笑顔でミサトに挨拶をしたアタシは、急に込み上げてきた吐き気を、なんとか堪えた。

（気持ち悪い……）

「大丈夫、アスカ？ 顔色があまり良くないみたいだけど……」

ミサトが心配そうな顔で、アタシに問い掛けた。

「大丈夫よ。ちょっと疲れただけだから」

(アンタなんかと対面したからよ！)

「で、ミサト。そっちのエースパイロット、碓シンジって誰？」

(もちろん知ってるけどね。一応、聞いておくわ)

「紹介するわaska。彼が初号機パイロット、碓シンジ君よ」

アタシはシンジに歩み寄ると、顔を近付けた。

「あなたがネルフ本部所属のエースパイロット、碓シンジね」

「う、うん。よろしくおねがい…」

(ミサトやファーストなんかにコイツを渡してやるものか！コイツを好きにできるのは、アタシだけよ)

アタシはシンジの顔に両手を添えると、更に顔を近付けシンジの唇を奪った。

「ンッ！？」

シンジは突然の出来事に、どうしていいのか分からず、そのまま固まっていた。

抵抗しないシンジの口の中に、アタシは無理矢理舌を入れた。

「ンッ！う、うんんー！」

アタシに舌を入れられても、シンジは抵抗をしなかった。

アタシは、とても濃厚で刺激的になるように、シンジと舌と絡めた。シンジはアタシのキスで気持ちよくなっているらしく、目がトロロンとしていた。

(どう？シンジ。ミサトのキスなんかより気持ちいいでしょ？)

アタシが唇を離すと、お互いの唾液が糸を引いていた。

「あっ……」

シンジは名残惜しそうに、アタシを見つめていた。

「お前ら公衆の面前で、なんちゅうハレンチなことを」

「イヤーンな感じ」

「アスカったらまあ大胆」

「……」

ファーストは目の前で起きた出来事に対して、全くの無表情だった。ただ、アタシが目を合わせると、ファーストは赤い瞳で殺気の込められた視線を向けていた。

(いい気味ね。人形のアンタにはまだ分からないと思うけれど、それを嫉妬って言うのよ)

「あ、あ、あっあの…式波さん？」

「アタシ、アンタに一目惚れしたみたい。これからよろしくねシン

「ジ

「ひ、ひっ、一目惚れ!?!」

「そうよあと、アタシのことはアスカって名前で呼んで。アタシもアタシのこと、シンジって呼ぶから」

「ア、アスカ」

「Danke!これからもよろしくね、シンジ」

(フッフ…シンジ。せいぜい今の内に、いい夢を見ておくことね)

第7話：カヲル登場（惣流パート）

ミサトのマンションで、アタシとシンジの同居が決まった。

シンジに、いきなりキスをしたりしたから、ダメかと思っただけに意外だった。

アタシはミサトのマンションに向かう間、これからどうやってシンジに復讐しようかと、色々と考えていた。

（カヲルには感謝しないといけないわね。アタシに復讐のチャンスを与えてくれたもの）

アタシはシンジに捨てられ、ファーストの残骸と赤い海が眼前に広がる砂浜で、一人ぼっちにさせられたのだ。

ただ、カヲルと交わした約束を思い出し、アタシは軽く鬱になった。

（まっ、なんとかなるでしょ。いざとなったら、ごまかせばいいんだし）

『そうはいかないよ、アスカ』

（カ、カヲル？）

アタシの頭の中で、カヲルが語りかけてきた。

『やれやれ、全くこれだからリリンは。僕の大切なシンジ君に復讐とはね。約束が違うんじゃないかな、アスカ？』

（な、何のことかしら？）

『僕は君に、シンジ君を幸せにしてくれと頼んだはずだよ。不幸にしてくれと頼んだ覚えはないな』

(分かってるわ。だからシンジに優しくしてるじゃない！)

『残念ながら、僕には君の考えている事は、全て分かるのさ』

(そっ、そんな……)

『悪いが、君には任せられない。君の身体を借りるよ』

アタシはカヲルに身体を、乗っ取られてしまった。

(やはりシンジ君を幸せにできるのは僕みたいだね)

『ちょっとカヲル！アタシの身体を返せ！自分自身の身体でシンジと結ばれればいいでしょ！』

(悪いけど、僕の身体はもはや存在しない。魂だけになってしまったからね)

『だったら、あっちの世界の式波に乗り移ればいいでしょ！』

(あちらの式波君とシンジ君は、うまくいきそうなんですね。興味が
ないよ)

『くっ！』

(アスカ、あとは僕に任せて、君はおとなしくしていてくれないか)

な?)

『カヲル、アタシの身体を使って一体何をするつもり!?!?』

(僕の身体ではないのは残念だけど、せつかく女性の身体になったからね。僕はシンジ君と一つになるよ)

『そ、それって、ま、まさか!?!?』

(シンジ君と僕との甘美な聖なる愛の営み。つまり、性交するってことさ)

『それだけは絶対にイヤー...!』

アタシはカヲルに乗っ取られた身体の中で、絶叫していた。

第8話：カヲルの策略（惣流パート）

僕が部屋で荷物の整理をしていると、シンジ君が帰ってきた。

「な、なんだこれ？一体どうなってるの？」

ダンボール箱の山を見て、シンジ君は驚いていた。

（お帰りシンジ君）

僕はアスカに成り切り、シンジ君を出迎えた。

「お帰り、シンジ。悪いけどアンタの部屋にアタシが入ることになったの」

「し、式波さん!？」

「アスカって呼んでって言ったでしょ。今日から同居することになったの。よろしくね」

「えっ！ええー…!!!!」

帰宅したミサトさんが、シンジ君に僕との同居について説明してくれた。

「そういうことだからシンちゃん。アスカと仲良くねん」

「でもミサトさん。僕は男ですよ」

(シンジ君、僕は求められれば心も身体も君に捧げるよ)

「シンジ、それってアタシを襲っちゃうかもってこと？アタシは別にいいわよ。シンジならいつでもOKよ」

僕がそう言つと、シンジ君の顔は真っ赤になった。

「ぼ、僕、夕飯の用意をしなきゃ」

シンジ君は、照れを隠す様に足早にキッチンに向かった。

(シンジ君。君の心は本当に硝子細工の様に繊細だね。好意に値するよ)

三人での楽しい夕食を済ませた僕がお風呂に入ると、ペンペンが入浴していた。

(初めまして、ペンペン。悪いけど、ちょっと利用させてもらっよ)

「キャ……！」

僕は大声で叫ぶと、お風呂場から全裸で飛び出した。

僕はキッチンで洗い物をしていたシンジ君まで走ると、そのまま抱き付いた。

「シンジー、お風呂に変な生き物がいるー！」

僕はシンジ君に胸の感触が伝わるように、押し付けた。

「!?!?!」

シンジ君は顔を真っ赤にして、そのまま固まっていた。

『ち、ちよつとカヲル！アタシの体でなんてことすんのよ！』

（いい所なんだから、少し静かにしてくれないか）

ミサトさんは突然の出来事に、呆気に取られている様で、何も言っ
てこなかった。

僕は胸の感触が、よりシンジ君に伝わるように押し付けた。

「あつ、ああ、あの、ア、アスカ!？」

「怖いよー助けてシンジー」

（シンジ君。君の体温、高鳴る鼓動が伝わり、僕の心は歓喜に満ち
ていくよ。自分の身体でないのが残念だけどね）

『キヤー！アタシの身体で何てことすんのよカヲル!』

（全く、いい所なのに邪魔をするとは不粋だね君は。少し静かにし
てくれないかな?）

『何がいいところよ！早くシンジから離れなさいよ!』

アスカは大声で僕に、罵詈雑言を浴びせ続けた。

(やれやれ、こつも騒がれると僕も疲れるよ。少しの間、休ませてもらうよ)

カヲルがそう言った後、乗っ取られていたアタシに身体の五感が戻った。

「…イツ、イヤー！」

アタシは急いで離れると、シンジの左側頭部にハイキックをかました。

アタシは顔を真っ赤にして、一目散にお風呂場に戻った。

アタシは羞恥のあまり、心臓の鼓動が早くなっていた。

(シ、シンジに裸で抱き着くなんて。は、恥ずかったよう……。……カヲル、覚えておきなさいよ！)

第9話：式号機起動（式波パート）

アタシはシンジに抱きしめられて心地よかったが、このままではいられなかった。

アイツに見せられた記憶では、ネルフ本部が戦略自衛隊とエヴァ量産機に攻撃を受けるからだ。

「シンジありがと。もう大丈夫、急いで本部のケイジに向かうわよ」

「うん。わかったよアスカ」

アタシとシンジは警報の鳴り響く通路を、ケイジに向かって駆けた。ケイジに到着したアタシとシンジは、プラグスーツに着替え、エヴァに乗り込んだ。

式号機に乗ってシンクロを開始したアタシは、ママに問い掛けた。

（この世界のアタシのママ。お願い、アタシとシンジのために起動して）

アタシの身体は暖かくなり、まるでママに抱きしめられているかの様に心が安いだ。

アタシの呼びかけにママは応えてくれて、式号機は起動したのだ。

（ありがとママ）

式号機の起動を確認したミサトが回線を通じ、アタシにお世辞を言った。

『アスカ、シンクロ率の回復と弐号機の起動おめでとう』

「どういたしまして、ミサト」

『早速で悪いんだけど、戦略自衛隊がネルフ本部を占拠するために攻めてきているわ。シンジ君とアスカでこれらを殲滅しなさい』

『えっ……』

ミサトからの指示に、明らかにシンジは動揺していた。

『戦略自衛隊を殲滅？兵器には人が乗っているのに…人殺しなんて…できる訳ないよ……』

『シンジ君。これはしかたないことなのよ。受け入れなさい』

ミサトはシンジの気持ちも考えず、一方的に命令を下した。
アタシは、ミサトに詰め寄った。

「ミサト、アンタはシンジに人殺しをさせようっていう訳？」

『しかたがないでしょ。そうしないと、こっちがやられるわ』

「アンタはシンジが、これまでどんな気持ちでエヴァに乗ってきたのか、少しでも考えたことある？」

『そ、それは……』

「シンジは兵器でもなければロボットでもない、何かあれば心が傷つく人間なのよ！」

『そ、それはわかってるわ』

「わかってない！アタシの変わりに来た弐号機パイロット、渚カヲルをシンジに殺させてるくせに！」

『彼は使徒だったのよ。彼を殺さなければ人類が滅んでいたのよ』

「ふざけんじゃないわよ！シンジはアンタ達の人殺しの道具じゃない！」

『あ、アスカ……』

シンジはアタシとミサトとのやり取りに、思わずアタシに声を掛けた。

「シンジは黙ってて。ミサト、アタシは軍人よ！対人の戦闘訓練も受けてる。戦略自衛隊はアタシが殲滅するわ」

『…アスカがそこまで言うのなら、わかりました。戦略自衛隊の殲滅はアスカに任せます』

アタシはミサトに軽く頷き、モニター越しにシンジにウィンクするところ言った。

「シンジは主にエヴァの電源供給設備を守って。戦略自衛隊はアタシが片付けるから」

『でもアスカ……』

「シンジばかりに辛い思いはさせたくないのよ。アタシなら大丈夫だから心配しないで」

『うん、うん』

「よろしい。この戦いが終わったら、アタシだけにおいしいハンバーグを作ってね」

『うん。わかったよ』

(絶対に何があっても、シンジだけはアタシが守ってみせる！ママ、アタシに力を貸して)

こうしてこの世界でのアタシとシンジによる人類の存亡を賭けた戦いの火ぶたは、切って落とされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7711h/>

エヴァンゲリオン・入れ代わり

2010年10月9日15時58分発行